

3-1編集企画体制への道(2)

出版事業②「ハンドブック」を作る⑤「バイオメティックス」

代表取締役 吉田 隆

「吸着」と「薄膜」に取り組んだ5年の間に、大型企画本の編集スタイルは徐々に確立したと思う。「薄膜」は、発刊当時既刊本が少なかったこともあるが、重厚な存在感は際立っていた。何しろフジテクトの共同出版を除き、1000冊を超える書籍が皆無の中、本書は1246冊を数えたのである。担当した〇〇としても、本を作るため自分で何でもやらなければいけないという責任感と同時に、「薄膜」の次をどうすればいいか?いわば企画の壁に向き合うことになった。今回は、企画スタイルのマイルストーンとなったハンドブックの物語である。

●「バイオメティックス」

「薄膜」発刊から3年後、1998年の冬のある日、〇〇が「バイオメティックスを作りたい」と新企画を提案してきた。それまで、企画本の多くが私か〇〇顧問等、スタッフ以外からの提案によるものだった。常々、編集企画部内に企画マインドが育つ必要性を感じ、自分でテーマを探し出版企画を提案してほしいと言いつづけていたこともあり、その言葉を私は期待していたのである。

話は97年11月の「ゲルハンドブック」の発刊にさかのぼる。新年早々、〇〇は学会活動のために上京された監修者の長田義仁北海道大学教授(当時、現副学長)と打上げの機会を持った。その際、次回作に関するテーマに話題が及び、「バイオメティックス」に関心があることを伝えた。丁度、ケモメカニカル等に取り組む長田教授の教を請う内に、教授が本テーマに対し専門領域を横断するダイナミックな思想を持たれていることを理解した。長田教授監修による「バイオメティックスの体系化」という構想はその時生まれた。

●企画の時間～「薄膜」と「ゲル」の間～

〇〇にとって「バイオメティックス」とのそもそもの出会いは、95年暮れの「薄膜」発刊後、テーマ探索のために新聞・雑誌

の調査の他、図書館を歩き回っていた時のことだった。

御茶ノ水(当時)の日本化学会図書館で、関心が膨らみつつあった「バイオメティックス」をタイトルに付けた書籍が目に入った。ざっと目を通すと、「人工酵素」などの化学工学的視点の記事が中心だった。本来、生体・生物に学ぶと言う大きなテーマのはずだが、なぜこうした狭い領域に限るのか?「人工筋肉」や「マイクロマシン」など夢のあるテーマが満載の分野ではないのか?という素朴な疑問をもった。他の図書館で調べてもおおむね類似の編集方針であり、化学や生物という個別領域を超越した視点を持つ本は見当たらない。その後、別のハンドブック発刊打上げの折、関係者に専門的な意見を伺った時も、話題は「生体膜」などの狭い範囲に限定された。それだけじゃないはずだぞという思いがますます募ったが、その何かが見えないジレンマをかかえたまま時間が過ぎた。その突破口となったのが、長田教授との会合だったのである。「薄膜」から「ゲル」への期間は、いわば企画が発酵する時間であった。

●普遍性の表現

～「斬新な切り口」を求めて～

2000年9月に発刊された「バイオメティックスハンドブック」は、生物の機能をあらゆる角度から捉え直し、「形や構造の階層性」や「カオスと情報処理」などの新しい視点の成果を巧みに取り込むなど、旧来の切り口からは一線を画した、新しいバイオメティックスの定義を提唱する、挑戦的な企画・構成の書となった1250冊の意欲作である。

成功のポイントは、材料や生物に加え、力学や数学までカバーするユニークな編集委員の構成にあったと思う。本書の特徴である「新しい視点を巧みに取り込む」という思想は、その後の大型企画本でも定着している。例えば、「微生物利用の大展開」(2002年7月)は「新規微生物の

探索」「遺伝子操作による能力向上」「複合微生物系の利用」といった最新の学問の成果を章節の上位に位置づけ、旧来の章立てとは一線を画している。本書は監修者の今中忠行・京都大学教授の学問的な先進性に加え、監修者と編集者との「斬新な切り口」を求める理念の共鳴の上に実現した大著である。

〇〇が編集を担当した「界面ハンドブック」「環境触媒ハンドブック」或いは今後発刊が予定される一連の大型企画本は、いずれも監修者とのこうした理念の協働作業の上に成立つものである。

さて、あるテーマの知識の集合に対して、新しい視点を手がかりに斬新な切り口でまとめ直すという編集技術を通して、その本はその時代なりの「普遍性」を獲得する。

それは、既知の知識を集約しただけの「普遍性」と異なり、そのテーマの本質に迫りたいという意欲の結果でもあるため、そこには企画者当人の個性なりが反映されることになる。つまりは「普遍性」といっても企画者毎に本の内容は変わる。それが企画なり創造の世界の面白さである。

「吸着技術ハンドブック」「薄膜作製応用ハンドブック」「バイオメティックスハンドブック」を通して、ハンドブックの企画・編集スタイルが確立したが、その成果の上に立ち、後に続く若い企画者が彼らなりの表現による新たなスタイルを確立し展開していくことを期待する。

◎編集後記

サクラサク。陽気に誘われて花見で一杯の季節の到来である。今年は、ハルウララ協奏曲も相まって気分の高揚が割増に感じられる。春の日差しの中でまどろむと、猫になりたいなんて思ったりもする。太陽光でブクブクと、水の光分解・夢の反応を語ってくださった先生は当に髭のある化学少年でした。でもがっかりしたことも・触媒がどのように進歩しても、食べてやせる、塗るだけでやせる、触媒は開発されないとのこと。「断食が一番ですよ」先生にやさしい言葉を頂き、私は、世の中の厳しさ、化学の限界(?)を痛感しました。仕事もそう。手を抜いて、楽しんで、いい評価は得られません。私この桜の新入学季節、心新たにいろいろなことを頑張りたいということで、今月は締めさせていただきます。(あしだ)

◎編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からの便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755 東京都文京区湯島2-16-16 (株)エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係
FAX: 03-3814-9152 E-mail: k-kunimoto@nts-book.co.jp

NTSニュース

2004年4月号(通巻62号)
2004年3月25日発行